

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書】（小学校用）

都道府県名	京都府
-------	-----

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	京都市立桃山東小学校								
学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	2	2	2	2	2	2	2	14	19
児童数	58	63	67	57	64	62	5	376	

研究の概要

1. 研究主題

創造力を培う算数科の授業設計の確立

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

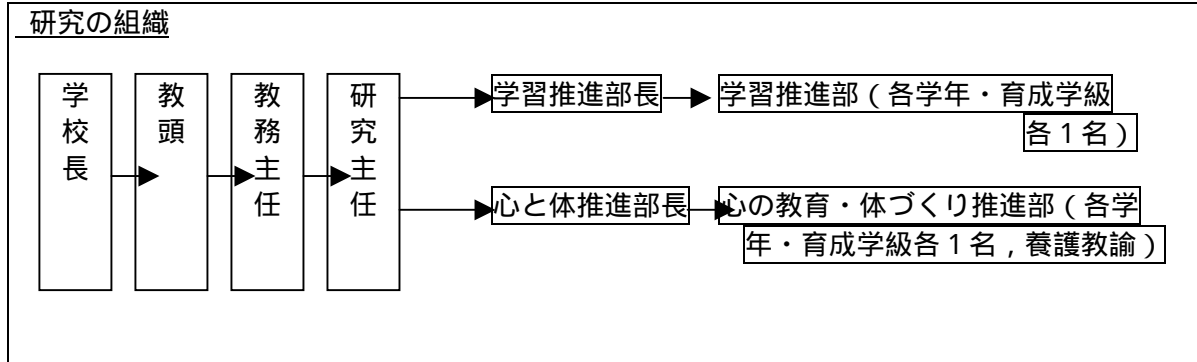
・全学級，学年・算数 学校として、当該教科に関する研究実績があるため

(2) 年次ごとの計画

平成15年度	テーマ								
	<table border="1"> <tr> <td>育成学級</td> <td>学習したことを生活に生かす子ども</td> </tr> <tr> <td>低学年</td> <td>自分の考えがもてる子ども</td> </tr> <tr> <td>中学年</td> <td>類推的な考え方をする子ども</td> </tr> <tr> <td>高学年</td> <td>蓋然的推論により考えを進める子ども</td> </tr> </table>	育成学級	学習したことを生活に生かす子ども	低学年	自分の考えがもてる子ども	中学年	類推的な考え方をする子ども	高学年	蓋然的推論により考えを進める子ども
	育成学級	学習したことを生活に生かす子ども							
	低学年	自分の考えがもてる子ども							
	中学年	類推的な考え方をする子ども							
高学年	蓋然的推論により考えを進める子ども								
研究の見通し（仮説） 各テーマに迫るため、以下の3つの視点について仮説を設定した。									
学びの自立 <仮説1> 自己評価・相互評価の場を1時間の学習展開において意図的・計画的に行うことによって「メタ認知力」が形成される。 <仮説2> 単元全体を通して評価規準を明確にし、教師が「概ね、十分満足できる実現状況の姿」を把握し、子どもに適切な評価を行うことによって、「意欲」が高揚される。									
創造力の伸長 <仮説1> 「創造力」となる能力を分析的に捉え、単元で培うことのできる能力を明確にし、指導計画に位置付けることによって、「創造力」を培うことができる。 <仮説2> 「創造力」とは、という定義を詳しく捉え、領域ごと、各学年ごとの重要な培うべき能力を明確にすることによって、漸次育成できる。									
響合し合う学習集団 <仮説1> イメージ化・操作化・言語化という一連の思考過程を重視することにより、解決への足跡（思考過程）を個々が明確にすることができる。 <仮説2> 集団による知的葛藤の場を設定することによって、共感的理解を得るとともに、知識や技能の根拠ある理解や習得が深まる。									

平成15年度	<p>研究の内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>内容</u> 以下のような姿を目指し、研究を深めていく。 <p><u>学びの自立</u> 一人一人の子どもが、学習を通して、達成感・成就感を感得し、自己の成長を自覚して、更なる学びへの意欲を高揚し、自立に向かう。</p> <p><u>創造力の伸長</u> 算数科の学習を通して、目標や内容を確実に定着するとともに、課題発見能力、問題解決能力、探究や考究する、所謂、思考・判断力、推論する力、表現力、情報収集選択処理する力等、「創造力」を培うことによって、「確かな学力」を育成し、「生きる力」の礎を育む。</p> <p><u>響合し合う学習集団</u> 自己の活動や思考過程を集団に問いかけたり、集団で吟味し合ったり、教師の「視点の導入」における「発想の転換」を行ったりして、教師と子どもとが創り出す学習集団の成立により、確かな根拠や営みを自覚し、内容の確実な定着を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>方法</u> 「創造力」を培う授業設計 ・ 構成要素となる力の整理 ・ どの単元、時間、方法で培うのかということの明確化 <p>協力指導体制 少人数指導</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 習熟度別の編成 <p>発展的・補足的な学習 評価規準・評価の方法 焦点化児童 内容に関して</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 算数的活動 ・ 視点の導入と発想の転換
平成16年度	<p>テーマ</p> <p><u>創造力の焦点化</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 思考力（蓋然的推論…類推的な考え方・帰納的な考え方）を培う。 ・ 自ら発展的・統合的にとらえる力を培う。 <p>研究の見通し</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 次の5点を仕組み、授業設計する。 <ul style="list-style-type: none"> …総合的な学習の時間「創造」と算数科を中心とする「確かな学力」の系統的・関連的な関わり …視点の導入による発想の転換の場 …思考力（類推的な考え方、帰納的な考え方）を培う場 …メタ認知力を培う場 …自ら発展的に考える場 <p>研究の内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 5,6年のカリキュラムを作り、年間に発展的・補足的な学習を行う時間を10数時間位置付ける。 ・ 総合的な学習の時間「創造」との関連を強力に図り、より一層の真の学力の育成を目指す。

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

* 子どもの学ぶ意欲に関する意識調査及び教育課程実施状況把握調査のデータを基に研究主題「創造力を培う算数科の授業設計の確立」を設定し、以下の3つの視点を通して「確かな学力」を、地道ではあるが定着することができたと判断する。

- (1) 学びの自立
 - ・メタ認知力の育成
 - ・子どもの主体を発動させる「視点の導入」
- (2) 創造力の伸長
- (3) 学び合う学習集団
 - ・伝え合う力の育成
 - ・集団思考を成立させる学習集団の組織化

2. 今後の課題

* 以下に示す内容について、継続的に実施する。

- (1) 学びの自立のためのメタ認知力の育成と視点の導入のあり方
- (2) 創造力の育成
- (3) 学び合う学習集団の成立

* 以下の内容について、新たに実践する。

- (1) 家庭学習と日々の授業の連携と、客観的なデータによる学力向上の分析
- (2) 総合的な学習の時間「創造」と算数科で培う創造力、及び、メタ認知力との関連を図る実践

学力等把握のための学校としての取組

< 実態把握調査 >

- ・ 調査の目的 (教育課程実施状況把握調査、及び、学ぶ意欲に関する意識調査) 本校児童と全国平均との比較による実態把握
- ・ 実施内容
平成13年度小中学校教育課程実施状況調査と共に行われた学習に関する意識等についてのアンケートに基づく内容
- ・ 実施時期
各学期末

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

* 合同研究発表会	
・日時	平成16年2月6日 午前の部 午前10時～11時45分 午後の部 午後1時45分～5時
・場所	午前の部 (全体会) 京都市呉竹文化センター 午後の部 (分散会) 京都市立桃山東小学校
・内容	午前の部 座談会「これで大丈夫か!?～算数教育の充実を目指して～」 文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官 国立教育政策研究所教育課程研究センター 教育課程調査官 吉川 成夫 先生 前文部省初等中等教育局教育課程課 教科調査官 筑波大学助教授 清水 静海 先生 午後の部 7公開授業・全体会・分科会 「授業を問う!!～子ども一人一人に届く授業設計～」 指導助言 前文部省初等中等教育局教育課程課 教科調査官 筑波大学助教授 清水 静海 先生 横浜国立大学教授 石田 淳一 先生 他
* 研究成果普及について	
・上記合同研究発表会参加者	1241名(本校713名)
・研究成果について	1000部CDR作成, 配布
・成果と課題について	H.p掲載
* フロンティアティーチャーとしての研究成果普及のための活動実績予定	
・	8月滋賀県総合教育センター主催の研修会にて, 実践発表
・	「初等教育資料8月号(東洋館出版社)」に本校の取り組みを執筆
・	「学校教育の評価改善事例集(第一法規株式会社)」に事例を執筆, 今夏刊行予定
・	「絶対評価のあり方」(小学館)を執筆

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

【新規校・継続校】	15年度からの新規校	14年度からの継続校		
【学校規模】	6学級以下 13～18学級 25学級以上	7～12学級 19～24学級		
【指導体制】	少人数指導 一部教科担任制	T・Tによる指導 その他		
【研究教科】	国語 生活 体育	社会 音楽 その他	算数 図画工作	理科 家庭
【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】	有	無		